筑波しらぎく

発行　筑波大学白菊会
茨城県つくば市
天王台1－1－1
解剖献体事務室
電話 029(853)3230

印刷　前田印刷株式会社
電話 029(875)6696

医学教育における肉眼解剖実習の重要性

筑波大学医学医療系　教授
高橋　智

筑波大学は、わが国最古の高等教育機関の一つとして誕生した「師範学校」が基盤となり、その後「東京高等師範学校」「東京教育大学」を経て現在に至っています。来年十月には、筑波大学の開学五十周年、創基一五一周年を迎えます。開学以来、人材教育重視の姿勢は大学の伝統であり、常に最先端の教育を行なって来ました。その精神は、東京高等師範学校の校長を務めた嘉納治五郎先生の「一人徳教広加万人　一世化育遠及百世」に明確に現れていると思います。医学教育についても同様で、筑波大学医学群は開設当初より、統合型カリキュラムや長期の臨床実習を国内で初めて導入するなど、最新の医学教育を実施して来ました。平成十六年度には、それまでの受動的な学習から参加型教育、発見的・選択的学習への改革を行いました。これは、教員が教壇から一方的に知識を教える受動的な教育を極力少なくして、少人数の学生が自ら与えられた課題を解決していく、自己学習を中心とした教育方法への転換でした。このような学習により、学生の学習意欲を高めると同時に、医師や医学研究者にとって最も重要な問題解決能力を養うことができます。この能動的な学習方法の導入とともに、技能・態度も重視する教育にも転換しました。臨床現場において知識はもちろん必要ですが、その知識を実践できる

令和元年度慰霊式（祭壇）

字　今井　凌雪（いまい　りょうせつ）
題　潤一　大正十一年十二月十九日生
略　立命館大学卒
紙　前筑波大学教授（芸術専門学群）
者　日展評議員・日本書芸院常務理事・
表　雪心会主宰
筆　朝日書道二十人展メンバー・日展文部大臣賞・
朝日書道賞、芸術院恩賜賞受賞

基本的な臨床技能を有していること、また患者さん中心の医療を実現できることが重要です。これらの技能・態度を習得するために、学生が実際に模擬患者さんに対して医療面接を行う実習や、知識や技能の認証を受けた後で、スチューデント・ドクターとして医療チームの一員として仕事を分担する、より長期の病院実習が導入されました。

令和元年度慰霊式（学長挨拶）

これらの実習を通して、患者さんに信頼される技能・態度を有する医師を養成しています。更に、平成三十年度には、日本医学教育評価機構（ＪＡＣＭＥ）の「国際基準に基づく医学教育分野別認証」を取得し、国際基準に適合した教育カリキュラムへのさらなる改革を行いました。その中で、卒業時に身に付けなければならない能力「コンピテンシー」を明確にし、その能力を獲得するためにどのような教育を行うかを明確にした学習過程「マイルストーン」を作成し、医学教育で実践しています。筑波大学医学群では、このような時代に応じた改革により国際基準に適合したカリキュラムにより、問題解決能力および患者さんに信頼される技能・態度を有する医師および医学研究者の養成を行なっています。

筑波大学医学群では、常に新しい医学教育を目指していますが、何時の時代でも完全な教育法というものは存在せず、今後も様々な改革をしていく必要があります。しかしながら、様々な教育改革の中にあっても、肉眼解剖実習の重要性は変わらないと思います。

なぜなら、肉眼解剖実習を通して学生が得るものは、解剖学的な知識のみならず、ご献体していただいたご遺体に接して初めて得られる医師、医療従事者になる者としての自覚であるからです。医師、医療従事者にとって、解剖実習で担当するご遺体は最初の「受持患者様」です。私自身は、卒業後直ぐに医学研究を始めたので、臨床の経験はほとんどありませんし、医学教育においても顕微鏡を使う組織学を主に担当しており、現在は肉眼解剖実習に参加していませんが、肉眼解剖実習を通して学んだこと、考えさせられたことはいまだに覚えており、医学研究者、教育者としての重要な部分を形成しています。今年になり、肉眼解剖実習に関連した不適切な事例の報告がありましたが、医学教育の携わる者としては、あってはならない事だと思います。

私の任期も残り少なくなってきましたが、今後も時代の要請に応じた教育改革を行いながら、白菊会を始めとする多くの方々のご協力のもとに、より良い医師、医療従事者、医学研究者の育成を行っていきたいと思います。

会員のみなさまからの便り

ウクライナの人々を思う

佐々木　利　男

ロシアによるウクライナ侵攻は、いかなる理由があったとしても、絶対に認められない。隣国ウクライナに何らの正当な理由も根拠も無く、一方的に武力侵略することは、現代の世界各国関係においては、あってはならないことです。ロシアの惨虐な一般市民に対する行為なども、絶対に許されない。尊い人命を虫けらの如く刹傷する、この戦争が、一日も早く終息することを願ってやみません。

ウクライナの国民の皆様方の上に、平穏無事な生活が訪れますようにお祈りしております。

七十五歳のざれごと

早　川　幸　雄

旧鉄道省土木技官であった私の父は、徴兵を免れた代わりに戦時物資の輸送力増強工事の下命を受け、劣悪な環境下での過酷な労働に因る無理が祟り死亡者が当時一番多かった肺結核に罹患、広義の意味に於いて戦争犠牲者の一人です。重い両肺結核で、進駐軍と関りの有った医師が、困難だった外国製治療薬の入手に尽力して呉れたお陰で命拾いしたと聞きました。元看護婦だった母は、五人の子供達を結核菌の感染から守る使命と共に、夫が休職期限内に復職出来ず解雇される不安や先立たれる恐怖に慄く葛藤の日々を、子供達は出世を諦め人生を棒に振った父を目の当たりにしていました。其れ故、一に健康二に健康、三も四も無く健康に勝るもの無しが我家の不文律となり、遊び惚けて勉強しない私は典型的な落ち零れの劣等生でした。只、幼いながら両親や姉兄の艱難辛苦を感じ取っていたのか、病気に対する関心は高く医者や薬に纏わる偉人の伝記本を読み耽り将来は医師になりたい思いを持ち続けていました。とは言え学力不足は否めず加えて浪人も下宿も許され無かったため、受験さえ諦め社会へ踏み出しました。後々に両親を始め友人・兄姉達の難病や最期に次々と向き合うも見舞う以外に成す術は無く、初志を貫き医学の道へ進んでいたなら何か手立てを尽くせたのではと忸怩たる思いでした。医学のために協力し得る方策を模索する中、医学生が崇高な志を改めて自覚するに資する解剖実習の献体を気付かされ十五年前に登録しました。目下孫（男子・十九歳）が二学年の解剖実習に挑んでいる最中で間もなく終了を迎える頃です。子供四人の一人でも医師にとの淡い期待も有りましたが彼等にその気は無かったようで、孫が私の密かな想いを果たして呉れそうです。不条理で悲惨極まりない絶対悪の戦争がウクライナに限らず起きてますが、軍隊・兵器等は言うに及ばず軍医なる語彙も消え失せて耳目に触れない永遠に平和で自由な世の到来を切に願っています。

解剖実習を終えて

荒井由芽

解剖実習の初日、これから始まる冒険への興奮と、何も知らないと言って過言ではない人体を自分の手で切り拓くことへの恐怖、それを承諾しご献体くださった方々とそのご遺族への尊敬の念で胸が一杯だった。そしていざ実習室へ足を踏み入れた時の実習室の空気と感情を一生忘れることはないだろう。

こうして六週間にわたる解剖実習が始まり様々な構造を剖出していったが、特に印象に残っているのが中間試問の直前に剖出した前十字靭帯である。それまでの実習では主に筋肉や血管、神経を剖出する作業が多く、自分の知識の浅さと相まって剖出したものと実際の臨床とが自分の中でつながっていないように感じていた。しかし私は体育会系の部活に所属していて、チームメイトの中には前十字靭帯を断裂してしまい手術を経てリハビリをしている選手が複数人おり、そんな彼女らを普段身近に見ているために、実際の前十字靭帯とそれが人体の中で機能する様子を目の当たりにし、こうして体の中の構造が異常をきたすと治療を必要とすることになるのだ、と人体と医療のつながりを実感することができた。

また私が医学を学ぶことを決意した理由のひとつに、人体の仕組みを知りたい、というものがあった。こうして医学の道を志した私にとって解剖実習は非常に興味深いものであり、心身ともに疲れ果てて一日を終わることも多々あったが、それでも毎日が興味と興奮で溢れていた。加えて実習をこなしていく中で強く実感したのが、医学の道は一生涯かけても全てを極めることは到底困難であるような、高く険しい道であるということである。実習中には実習書やアトラスを参照し班員と相談しながら剖出を進め、それでもわからない所や変異と思われる箇所などを先生に質問する機会が多くあった。そこでは先生は持てる知識を総動員し私たちの質問に答えてくださったが、私たち学生から見れば圧倒的な量の知識と経験を持つ先生でも説明しきれない事柄が人体には溢れていた。そしてその際は先生も一緒になってアトラスとご遺体を見比べ考察していた。このような先生の姿から、医学を学ぶということに限界はなく、わからないことはその都度勉強し知識を深めていくしか道はないのだと感じると共に、自分もそのような世界に身を投じることに

令和元年慰霊式（懇談会）

なるのだという覚悟を決めることができたと思う。

最後に、このような極めて貴重な機会を未熟な医学生である私たちに与えてくださったご献体いただいた方々とそのご遺族に感謝と尊敬の念で一杯である。この方々の偉大なる決断が正解となるよう、これから一生涯勉学に励み続けると共に、様々な病気を持つ患者を救い寄り添えるような医師になりたいと思う。

荒　若　由圭里

解剖実習を振り返ると過去の自分の様々な心境が思い出される。真っ先に抱く感情が達成感である。解剖実習のはじめの頃、体力的にも精神的にも疲弊し本当にこの六週間を乗り越えることができるのだろうかと途方に暮れることが多々あった。しかしすべて終わってみると六週間がとてもあっという間であり達成感に満たされていた。それと同時にこの解剖実習が私の思う「医学生らしい実習」であり、あらためて自分は医学部に入学し医学生であることを再認識することができた。

そして実習中、私たちの班で意識的に取り組んだことがある。それが「謝罪」ではなく「感謝」である。例えば、硬直して動きづらくなっているご遺体の腕や首などに力を入れて動かしたり、メスをいれたりする状況において、実習のはじめの頃は班員みんな意識せず「ごめんなさい」という言葉が出ていた。しかし献体としてご遺体を提供してくださった方は謝られることを望んでいるわけではないという話になり、「ごめんなさい」ではなく「ありがとうございます」という言葉をかけることを私たちの班では行ったことがとても印象に残っている。

一カ月半の解剖実習のなかで何度も感じたことが「個人差」である。男性と女性という性差はもちろんのこと、それ以外の点に関してもご遺体ごとに異なり、また実習書や教科書とも異なることを痛感した。特に私たちの班のご遺体は動脈や静脈の走行や分岐に関して変異を多く確認することができ、教科書ではさも当たり前かのように書かれている記述とは大きく異なっていた。これらの経験を通して私がこれから勉強し、将来従事することになる医療とは人を相手にするものであり、もちろん患者さんごとに様々な特徴や教科書通りにならない事態が起こると考えられる。そのようなことを念頭に置くとともに自分の持っている知識がすべて正しいと思わないこと、また常に医療はアップデートされていくので学び続けることを忘れず、目の前の患者さんと向き合いたいと感じる。

解剖実習という非日常的な六週間を通して精神的な面で大きく成長することができたと思う。また今まで頭の中でなんとなく想像していた臓器といった人間の構造物を実際に自分の手で剖出し目にすることで単なるイメージにとどまらず、視覚的、触覚的なより具体的な情報や知識を得ることができた。このような実習を経験できたことに感謝し、そしてこの経験を活かしながらこれからの医学の勉強に取り組んでいきたい。

池田周平

「ご献体くださった故人とそのご遺族の方々に感謝して、黙祷――」

緊張に包まれた空間で祈りを捧げ、ご遺体にメスを入れる。長く短い六週間が始まった瞬間だった。そしてそれは、医学生としての大きな一歩を踏み出した瞬間でもあった。緊張に飲み込まれそうになりながらも、覚悟を決めてメスを進めていく。そこからは流れるように一日一日が過ぎていった。気づくと分厚い解剖実習の手引きも後半に差し掛かり、仲間とノミナを確認しあいながら手際よく剖出を進める自分たちの姿に成長を見ることができたのを覚えている。私は毎日の実習をこなすのに必死で、家に着くなり倒れるように寝てしまうこともあった。それでも最後まで実習をやり遂げることができたのは紛れもなく班員同士の協力の賜物である。納棺の日。お花を添え、故人の生前の暮らしに思いを馳せ、何よりも感謝の念を胸に棺を見送った。怒涛の六週間を無事に終えたという安堵と、どこか喪失感に包まれながら、私の解剖実習は幕を閉じた。

何事も自分の眼で見て確かめることの重要性。これを強く感じることができたことは、解剖実習で得られた収穫の一つである。神経や血管の走行一つとっても、こんなにも人によって違いがみられるのかと驚かされた。実習の手引きの図と異なる部分もいくつかあり、「一般的」や「通常は」といった言葉をそのまま受け入れてはいけないのだと改めて感じた。将来医師として働くことになっても、与えられた情報を鵜呑みにせず、できる限り自分の眼で見たり、触れたりしたうえで様々な物事を判断していきたい。

また学ぶことの喜びをここまで強く覚えたのは間違いなく解剖実習が初めてであった。これまで知る由もなかった人体の深淵を間近で見て、触れる。強烈な体験に畏敬の念すら抱いたが、人体に関する新たな知識を得る喜びはそれをはるかに上回るものであった。目の前に広がる小さな構造一つ一つが複雑に絡み合い、作用しあいながら自分がいま生きているのだという事実に、感動すら覚えた。

忘れてはいけないのは、解剖実習や病院実習を始めとした様々な医学教育は多くの人々の協力なしでは成り立たないということである。当たり前の事実かもしれないが、今こうして学べているということを「当たり前」と思わずに大学生活に励んでいきたい。

最後に、ご献体くださった故人とそのご遺族の方々、実習を支えてくださった先生を始めご協力いただいた全ての方々に心より感謝申し上げます。

稲本夏子

先日、約六週間にわたる解剖実習を終えました。辛いこともたくさんありましたが、この実習を通して自分自身が医学生として大きく成長できたと感じています。このような機会をくださったご献体くださった方々及びそのご遺族に敬意を表し、感謝申し上げます。

実習初日、私は様々な気持ちを抱えていました。人生で一度の実習にあたり、経験して得た知識の全てを自分のものにしようと意気込み、実習を経験

することで自分がどのように成長できるか期待する一方で、人体を解剖することに対する恐怖心や六週間を乗り越えられるのかという不安もありました。しかし、解剖実習室に入り、ご遺体と向き合った瞬間に、恐怖心や不安といった類のものは一掃され、私は医学生としてこの実習に真剣に向き合い、ご献体から学ぶ義務があるのだと、気持ちを強くしたことを覚えています。

実習が始まり、教科書の紙面上ではなく、直接目で見て人体を構成する様々な組織を観察することは、人体の構造に対する理解を大きく進めました。一方で、教科書通りでないことも多く、剖出に苦労したこともありました。そのような中で、私が最も印象的だった先生とのやりとりがあります。私はその日、下肢の筋の剖出を試みていました。しかし、目的の筋が見当たらず、先生に質問すると、「筋が細いね。教科書と見比べるとわかるけど、本当はもっと太いんだよね。最期はあまり歩けてなかったのかな」とおっしゃいました。私はこの時初めて、身体はご献体くださった方の生活や背景を物語るのだということを実感し、破格だけが個別性ではなく、生活や背景が身体に個別性を生み出すことを学びました。その後の実習では、個別性を意識して人体を構成する様々な組織を観察し、動脈硬化を観察した際など、折に触れ、生前の生活や背景に思いを馳せました。

中間試問や最終試問も何とか乗り越え、気がつけば六週間が過ぎ、納棺の日を迎えました。ご献体くださった方が、人生の最後に、私たち医学生に解剖実習という貴重な機会をくださったことに感謝し、「貴重な学習の機会をありがとうございました。必ず社会に貢献できる医師になります」と伝え、納棺を終えました。

私は、ご献体くださった方から人体の構造に加え、個別性を考えることの大切さを教わりました。教わったことを、これからも大切にして医学の道を進んでいきます。

岩野亜美

四月から医学類に移行してから約二カ月。病理学、薬理学と必死に授業とテストをこなし、息をつこうとしたのも束の間、解剖実習が始まった。先輩方から勉強や実習中の話は耳にすることはあったが、知識も経験も同学年より少ない自分が六週間でどう成長できるのか、全く想像が付かなかった。

初めて大学の解剖実習室に入ったとき、一昨年、本学に入学する前に在籍していた大学で医学部が解剖を終えたご遺体を見せていただいた時に感じたピリッとした緊張感を感じた。各々感じていることはたくさんあるのに、それを口にしてはいけないような雰囲気。さらし・ネル布・ガーゼを取るのも初めての経験であるのに平常心を保つためか、まるで慣れているかのように次々と手引き通りに解剖を始めたのを覚えている。

手引きや教科書、3Dアトラスを見ながら予習をして解剖に臨んでも、脂肪や皮膚の厚さは教科書にはもちろん書かれていないため、実際にご遺体と

向き合うと教科書通りに観察できないこともあった。また、血管や神経の走行、臓器の大きさは個人差があり、自分たちの班だけでなく他班のご遺体からも学ぶことは非常に多かった。

最初は皮静脈を剖出して一つ一つ同定しようとしていた私が、徐々に回数を重ねていくにつれ、重要な働きをする神経や血管のみを見極めて剖出できるようになっていった。特に、腕神経叢を教科書通りの走行で剖出できたときは、何も見ずに説明できるよう何度も班員に説明したり、まだ剖出できていない他班の班員が参考に見に来たりするようになった。解剖実習が進むにつれ、班員同士のコミュニケーションが増え、学習不足の部分をお互いに補い合えるようになった。他班の学生とも分からない箇所を教え合い、一丸となって中間試問や最終試問に臨んだことが印象に残っている。さらには、M3、M6の先輩方がサポートとして実習に参加してくださり、解剖の知識だけでなく、どの部位が臨床で重要になるのかも加えて教えてくださった。

最後に、医療関係ではない部員や先生、友人などに解剖実習の存在を話すと、「献体してくれる人がいるそうだね」とよく言われることがある。自分は、物心ついた頃から医療系の仕事や学問に興味があったため、「献体」の存在は当たり前だと感じていたが、筑波大学でこれまでの先輩方が培ってきた患者さんとの信頼関係やご献体くださった故人やそのご家族の意志があってこそ、私たちは今、医学という責任ある学問を学ぶことができるのだということを改めて感じ、今自分たちが高度な医療を手軽に受けられるのもそのような方々のおかげであることを、医学生である自分たちだけでなく、それ以外の人々が広く知っているべきであると強く感じた。

解剖実習に携わってくださった全ての方々に感謝し、これからも医師を志す者として自覚と責任を持ち、医学を学んでいきたいと思う。

臼井彩菜

解剖実習を振り返り、人体の構造や機能をはじめとした多くの知識を得ることができたという達成感と、満足に理解しきることができなかったという悔いを感じている。

実習初日、不安と緊張で足がすくみ、ご遺体に触れることさえなかなかできずにいた。そして初めてご遺体にメスを入れさせていただいた時、「もう後戻りはできない、責任をもって精一杯学ばせていただこう」と決意した。どこにどのようにメスを入れたか、その時の緊張感、手の震えや感触は今でも鮮明に覚えている。実習を通して人体の構造の複雑さを改めて感じた。自らの手で解剖を進めやっとの思いで目的の構造物を目にしたとき、何度教科書や図譜を見てもイメージすることができなかった構造がすっと頭に入ってきて感動を覚えた。反対に頭では十分理解したと思っていた構造も、実際に同定を試みると手も足も出ないことが多々あった。これまで座学をメインに学び、理解した「つもり」になっていた自分

に恐怖を覚えた。実習の必要性を感じるとともに、今後自分が向き合うのはひとりひとりの人間であるということを再認識させられた。このような貴重な経験をさせていただいたことに感謝したい。

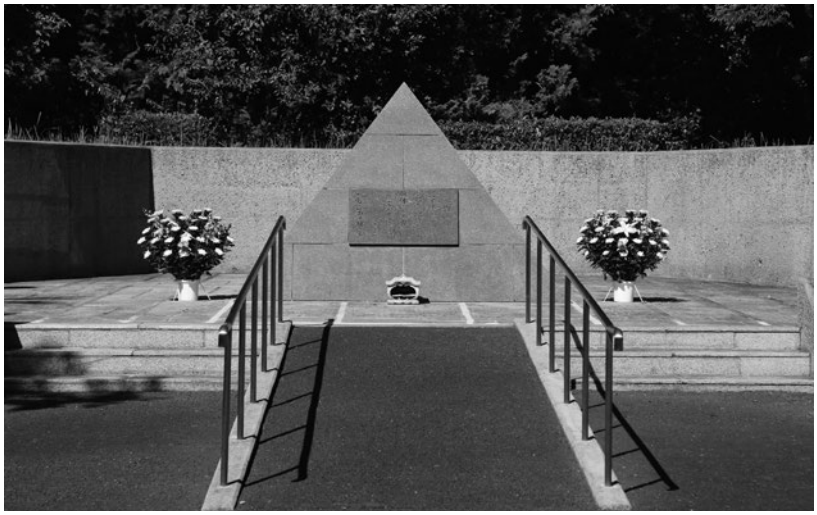
六週間の実習期間は、毎日実習の手引きや図譜を持ち歩き、予習と復習に明け暮れ、一つでも多くのことを学ぼうと必死に解剖に向き合っていた。筋や骨の立体的な配置や相互作用、血管や神経の複雑な走行、臓器の大きさや色など様々なものを観察し、実際に触れながら多くのことを学ぶことができた。しかし同じくらい、十分に理解できていない事柄も頭に浮かび、まだ学べる事があったのではないかという心残りや後悔もある。納棺後、私は大切な人を失ったかのような寂しさと、まだ実習を続けたいという悔しさから涙をこらえきれず、来年もやらせてくださいと言いに行った。何度実習を行ったところで、奥深く、また日々進歩している医学を理解しきることは不可能であろう。しかし、この悔しさを忘れずに、今後経験するひとつひとつの機会を大切にし、努力し続けたい。

実習を終え、訪れた慰霊塔にこう刻まれていた。「讃仰、医学徒にはげましと大きな期待を寄せて献体された方々の御霊を永遠に讃えてここにいしぶみを築く」これを読み、ご献体くださった方は自身の身を捧げ、私たちに期待してくださっている以上、私も真摯に医学に向き合い、立派な医師になるために精進する義務があると思った。同時に、多くの方々が私の夢を後押ししてくださっていることに勇気づけられた。

最後になりますが、ご献体くださった方とそのご遺族の方々、丁寧にご指導してくださった先生、解剖実習にご協力くださった全ての方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

梅津成美

解剖実習について初めてしっかりと意識したのは、大学一年生のちょうどこの時期、七月頃だったと思う。まだ大学に慣れていなかった自分は、帰宅途中に曲がる道を一つ間違って、ご献体くださった方々の慰霊塔にたどり着いた。何気なく足を踏み入れたため、石碑に彫られた文を読んで「これからお世話になる方々の慰霊塔だ」と気がついた途端、強い緊張を覚えた。手を合わせて顔を上げた後、手前に目をやると、まだ新しい花束が供えてあったことが印象に残っている。



白菊会慰霊塔

いざ解剖実習に臨み、はじめて解剖台の前に立ったときには、慰霊塔を前にしたとき以上の緊張があった。実習期間は想像以上に慌ただしく、予習復習のための時間的な余裕がないことはもちろん、亡くなった方のお身体をお借りしていること、実際にその構造を剖出できる機会は一度きりであることが常に頭にあった。しかし、そうした緊張の中でも、発生学との関連、生理機能と実際の構造との相関について学ぶことは楽しく、実際に観察するなかで新たな疑問や学びを得ることができた。また血管や神経の走行、各臓器について予習をしていっても、実際にお身体で見てみると個人差による何かしらの違いがあったり、周囲の組織の存在により観察が難しかったり、「人体を扱うというのはこういうことなのだな」という実感を得て、考えさせられることが多くあった。神経系、循環器系、内臓系など、分割された状態ではなく、あらゆるものが複雑に配置された人体として観察できたからこそ、位置関係の把握にも役立った。先生から、どのような手術の際にどのような構造を傷つけないよう注意するべきか、その実際について伺う機会もあり、解剖実習で得た実感の一つ一つが将来医師として働くときに重要であることが理解できた。

「何よりもまずは、みんなの先生になってくれた皆さんに感謝を」これはある先生が解剖実習最終日の挨拶のなかでおっしゃっていた言葉だが、「先生になってくれた」これが自分にとっては胸にストンとおさまるような表現だった。うまく剖出できなかった部分も含めて、どこでどのような構造を探したのか、自分の担当した部分は特に鮮明に覚えている。実習が終わり、改めて教科書等で解剖学を学び直す際、予習の段階と実際の記憶をたどりながらの学習とでは理解の深さが全く違うことを実感し、本当にたくさんのことを教わったのだなと改めて思った。実習を終え再度慰霊塔に挨拶に伺ってみて、ただ驚き緊張していた以前とは違い、背筋の伸びる思いがした。自分が花を供える側になって、昨年慰霊塔に献花していた人もこんな気持ちでいたのだろうかと思うと感慨深いものがあった。自分もこれから本格的に臨床医学を学び始める。実習を通して学んだことを活かし、これから出会う患者さんたちに還元していけるよう、努力を続けたい。

小林可怜

解剖実習を強く意識したのは、実習が始まる前週の火曜日であった。それまでの「解剖実習がある」という意識が「解剖実習を行う」という意識に変わった。この日、私は祖父の通院の付き添いで都内の大学病院に行った。院内にいる方一人ひとりが病気と闘いながら立派な人生を送っているということを感じた。そして、次週から始まる解剖実習ではどのような人生を送ってこられた方とお会いすることになるのだろう、ご献体くださったことに対して感謝と敬意を忘れてはならないと強く思った。実習を行うのだという実感がわいたとともに怖さをも感じた。

六週間という解剖実習を終え、特に印象に残っているのは最初と最後の日

である。

実習初日、この日を迎えたという大きな緊張と怖さを抱えながら大学に向かった。ロッカー室の空気が普段と異なり、各々が様々な思いを抱いて実習に臨んでいるというのを感じた。解剖実習室に入り、ご遺体の前に座った時、これから解剖をするという恐怖に押しつぶされそうになった。この時は、この方はどんな人生を歩んでこられたのだろう、と思いを馳せるような余裕はなかった。先生の説明を聞いている間、手の震えが止まらなかった。初めてビニールを開いた際にはご遺体の顔を見ることができず、自分の弱さを痛感した。覚悟を決めて顔を見た時、とても穏やかな顔をしていらっしゃった。人生を全うして、最後に我々医学生の教育にお身体を捧げてくださっていることに改めて感謝し、それに応えなければならないという強い責任感を持った。

実習が進むにつれて、恐怖の対象は変化した。最初は、人体を解剖するという行為、それを自分がやるという恐怖であったが、人体そのものに対する恐怖へと変わった。特に後半の臓器を中心とした観察では、筋腫や動脈瘤、再建痕等を見て、こんな状態でも人は生きられるのだと怖くなった。同時に探求心も生まれた。医学の道を志した理由の一つに、人体について学びたいという漠然としたものがあるが、解剖が進むにつれ人体の神秘にのめり込んでいった。

実習最終日、試問を終え他班は片づけをして参考書で勉強している中、我々の班は最後まで剖出と観察を続けた。時間が許す限り見て学ぶことで故人の遺志に応えることができると考えた。最後まで剖出してもなお、まだ観察しきれなかったことは多いと感じる。実習最後に先生の話を聞いて、様々な感情が自分の中に沸いてきた。筆記試験が終わった今も未だに感情の収拾がついていない。しかし、解剖実習をやり遂げ、やっと医学を志す者としてのスタートラインに立つことができ、自信を持つことができた。

どれだけ予習しても、いざ剖出しようとするとわからない。わからないながらも、もがき続けたこの経験は、今後自分が臨床の場に出て患者さんを診察したときにも大いに役立つだろう。

六週間、精神的、体力的に辛くなった時もあり、周りの人に支えてもらいながら実習をやり遂げることができた。ご献体くださった故人、そのご遺族、そして先生や友達、家族に感謝を表してこの文章を締めくくりたいと思う。ありがとうございました。

令和元年慰霊式（会場内）

島津祐貴

医学の道を進むと決めてから何度も話を聞いてきた解剖実習。実習開始の前日、ついに始まることに対する少しばかりの緊張と医学生として大きな一歩を踏み出せることへの胸の高鳴りを感じながら眠りについた。

当日、白衣に着替えようとロッカールームに行くと、すでに多くの仲間が白衣をまとい、分厚い教科書をもって友人と話していた。緊張しているからかわからないが、みな少しばかりせわしない様子であった。解剖実習室に入るとビニールに包まれたご遺体が並んでいた。先生の合図とともにビニールを外し、はじめてご遺体を実際に見た。ご遺体を目の前に、今からこの方を解剖していくと考えると、自分にできるのだろうかと少し心配になった。まもなくして生徒は一斉に一日目の作業を始めた。私は一生懸命に解剖をした。そんな中、自分の心に一つのためらいがあった。それはご遺体の顔を見ることである。失礼なことであるのは承知しているが、顔を見てしまったら苦しんでいる顔が頭の中で何度も思い出されてしまうのではないかと考えてしまった。それでもやはりお身体を使わせていただいているので、自分もしっかり向き合おうと思い、お顔を拝見した。その方のお顔は私の想像とは違い苦しい表情ではなく、冷たいお身体から得られるはずのない温もりすら感じさせる暖かい表情をしていた。

そこから長いようで一瞬で終わってしまう六週間が始まった。日中は解剖、夜は復習と予習の繰り返し。私にとってこの六週間は強がっても余裕だったといえるものではなかった。それでも毎日学習を重ねていくことで自分の中に着実に知識と経験が積み重なっていくのを感じ、少しずつ医師への階段をのぼっているように思えた。

最初は顔を見ることすらためらっていた私だが、解剖を進めていくうちにだんだんとご献体くださった方のことを考えるようになった。この方はどんな人生を歩んだのだろうか。どんな人に出会い、どんな人に囲まれていたのだろうか。いろいろな想像が頭の中を埋め尽くした。だが、不思議と笑っている様子しか頭の中に描かれなかった。

最後に、今回の解剖実習においてお世話になった方々に感謝の意を表したいと思う。この六週間、無知で未熟な私たち学生を毎日のようにサポートしてくださった先生にはとても感謝している。そして何よりご献体くださった故人とそのご遺族の方には生涯において最も貴重といえる経験を私たちに与

令和元年慰霊式（献花）

え、医師となるものとして、そして人間として私たちを成長させてくださったことに心より感謝申し上げます。

鈴木有咲

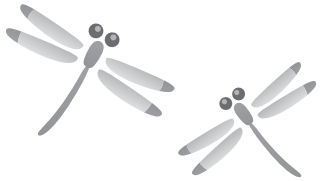
解剖実習の初日、静寂に包まれた実習室の雰囲気と、ご献体くださった方の前に立った時の緊張感は忘れられない。これから六週間の実習で、しっかり学ばなければと決意した瞬間でもあった。初めてメスを入れた時、思っていたより硬いと感じた。しかし、その後は案外すっと切れる印象だった。そういった感触は今でも覚えている。

もともと、私はこの解剖実習には期待を寄せていた。人体はどのような構造をしているのか、単純に興味があったからである。実際に解剖実習を終えて、自分の目で見てこの手で触れて得られたものはとても多かった。だいたいどこにどのような組織があるのかは知識としてあっても、血管の太さや筋肉の厚み、他の臓器との連関などを実際に見ることができたのは興味深かった。私が特に感じたのは、体の中は結構詰まっているということだ。血管や神経の周りには脂肪や結合組織で埋め尽くされているし、臓器は重なり合っていて、たくさんの腱や靭帯で骨や筋肉のつながりができていた。また体の中はこんなにも人によって違っているのだと気付かされた。脂肪の量や臓器の大きさは本当に人それぞれで驚いた。そして、私たちが将来診察する患者さんはこれほど差異があるのだから、その人にあった治療をしっかり考えて提供しなければならないのだと思った。

解剖実習の最終日、故人のご遺族が用意してくださった棺にお納めする時、今目の前にいる方は確かに生きていたのだと感じた。この方は私のことは知らないけれど、私は解剖実習を通してこの方が生きてきた道のりを感じることができた。そこから、生前の暮らしなどに思いを馳せることができた。これも人との触れ合い、コミュニケーションの一つなのではないかと思う。医師は患者さんとのコミュニケーションが大事だというが、それは言葉のやりとりだけでなく、患者さんのお身体の状態から何を訴えているのか感じることも大切だと思った。

解剖は本来ならば許されざる行為である。ご遺体を解剖するというのは医学生にのみ許された行為である。これはすなわち責任だと思う。私たちはこの解剖実習でご献体くださったご遺体に接して、将来のために学ぶという責任があった。正直、日々の予習復習、実習では剖出に追われてその責任を全うできたと胸を張っては言えない。それでも、六週間の解剖実習で学んだことはこれからのために必ず役立てたい。そして、これからも真摯に学ぶ姿勢を忘れずに過ごしていきたい。

最後に、ご献体くださった故人と、そのご遺族に感謝します。本当にありがとうございました。



田村最愛

前年、祖母を見送ったあの時とは全く違った光景だった。思い出を語り合うざわめき、名残を惜しむ手、花と香のしんとした匂い。そんな別れの儀式を自ら手放し、医学のためにと身を横たえてくださったお姿だった。感動と、緊張と、少しの怖れと。汗で湿った手を合わせると、私は初めてのメスを握った。

実習の道具を買い揃えた頃から予習をし、頭の中で幾ばくかのシミュレーションもしていた。だが、イメージしたようには捗らなかった。メスの扱いが難しい。皮切りを失敗してばかりいる。もっと鮮やかに剖出できるものだと、理解できるものだと、そんな甘い考えは早々に打ち砕かれた。小さな失敗をするたびに、「申し訳ありません」と心の中でご献体いただいた方に呟く。実習書とアトラスを睨み首を捻っては、また剖出を進める。気が遠くなるほどの繰り返しだった。実際に手に触れ目で見る人体はアトラスに描かれる通りではない。そんな当たり前に戸惑う間もなく、実習は進んでいく。私は理解できているのか。人体の構造を、ご献体くださった方のお気持ちを、学べているのか。焦りを感じ始めていた頃。

その時私は腕神経叢を剖出していた。腋下を切開し、神経の束を探っていた。五つの神経を同定するのは困難で、ただ「神経の塊」としか見えなかった。脊椎まで辿りついた時、やっと私は神経叢というものを理解した。それが、地味な作業を積み重ね、根源を辿り、全体を見る。これから医学を学ぶことは、そういうことかもしれないと気づかされた最初の経験だった。そうした経験を重ね、ようやく私は剖出した部分ではなく、この方ご自身と向き合うようになっていった。

その方には心肥大があった。そこから肺を悪くされていたのだろうか。お身体にどんな不調がありましたか。お苦しみはありましたか。何を思い、どんな日々を過ごしていらっしゃいましたか。気づくとそんなふうに対話を重ねるようになっていた。そして私はこの方に、人体の構造だけでなく、「生きること」について教えていただいたように思う。

この方のお身体に刻まれた歴史。生きてきた証と病の跡。解剖実習を通してそれらに向き合うことで、生ということ、それに関わる医師としての在り方を学ばせていただいたように感じた。

人と真摯に向き合う。問いかけ続ける。お話を伺う。病という部分ではなく、その人の歴史を理解しようと心掛ける。実習から学んだそれらは、これから医学を学んでいく私たちにとって忘れてはならない姿勢であると思う。

この方は私の初めての患者さんであり、私の師にもなってくださった方だった。

ありがとうございました。ご遺志を心に刻み、これからも学んで参ります。

三原常太郎

私は解剖実習が始まった日、実習室に入るまで、解剖というものに対して実感が湧かなかった。人間の死体を見たことはなかったし、あまつさえそれを切り開いて解剖するなど想像もでき

なかったのだ。そんな私の自堕落な姿勢は、鼻をつくホルマリン臭のする実習室に足を踏み入れた途端に消え去った。そこには布とビニールに包まれたご遺体が整然と並べられていた。自然と口数が減った。ビニールを取り去る指示が出た。布を開くと、自分たちと何ら変わらない、お亡くなりになられた一人の人間と対面した。

最初の作業は皮切りだった。人間の体にメスを入れることには根源的な抵抗があったが、その抵抗感も日に日に薄れていった。人の命を頂いているのだからと、勉学にも気合が入った。分からない部分も多々あったが、先生や先輩、同輩のおかげで何とかものにすることが出来た。人の体が機能するメカニズムを直接目で見て実感したことは、私たちにとってかけがえのない糧となるだろうと感じた。

実習最終日、納棺を行った。私たちのご遺体はご遺族の方の用意した棺に納めることになっていた。ご遺体を綺麗にし、納棺するため棺を開けると一枚の色紙が目に留まった。

それは寄せ書きだった。暖かい言葉に溢れた色紙を見ると、この方がどれだけ周りから愛されていたのかが伝わってきた。私はそこで初めて、自分が一カ月半向き合った方の名前を知った。

自分達が勉強させて頂いていただき献体くださった方々は、ずっと〝人間〟だったのだ。生前に勇気あるご決断をし、亡くなられた後にご献体としてその場にいらっしゃった方々は、死してなお一人の個人としてご遺族、ご友人の心で生き続けていた。

私は解剖実習で人間の尊厳を学んだ。人間は死んだとしても、永遠に尊厳をもって人間としてあり続けると知った。思えば、死者の尊厳を尊重し、最大限の敬意を以てご遺体に接し、得られる限りを学ぶことが、解剖実習期間の私たちにとって義務であり続けた。私はその義務を果たせただろうか。

少なくとも一つ言えることは、これから医学を学び、社会に対して少しでも貢献することが、多くを頂いた私たちが出来る恩返しであるということだ。私もこの実習で学んだことを糧に、医療者の義務を果たせるような医師になるため日々邁進していきたい。

今回の解剖実習では、他では得難い経験をした。何もかもが未知だった。この経験は、自分が医師となっても、死んだとしても決して忘れることはないだろう。

最後に、ご献体という勇気あるご決断をされた方々と、その遺志を尊重して下さったご遺族の方々、そして日々私たちの実習を支えて下さった先生に、心より感謝申し上げます。

新会員

会員番号	氏名
二四三八	小泉清枝
二四三九	名川吉信
二四四〇	名川晴美
二四四一	田中雪子
二四四二	三田剛郎
二四四三	長嶋正三
二四四四	長嶋祐子
二四四六	岡部鐸義
二四四七	田中義也
二四四八	田中眞人
二四四九	蔵渕俊郎
二四五〇	坪内寛夫
二四五一	大場けい
二四五二	木村昭二
二四五三	加賀きく枝
二四五四	髙岩泰子
二四五五	中平伊佐緒
二四五六	中平伊枝
二四五七	樋口雅子
二四五八	伊藤まゆみ
二四五九	山内若江
二四六〇	村田仁
二四六一	岡里勝
二四六二	潮田静男
二四六三	青木つや子
二四六四	田所ナミ子
二四六五	赤熊吉子
二四六六	髙橋美佐子
二四六七	椎名道子
二四六八	中島一二
二四六九	宇留野悦子
二四七〇	KITAYAMA WICHCHANEE
二四七一	北山政行
二四七二	石田さい
二四七三	常光寺範子
二四七四	常光寺一夫

成願会員

会員番号	氏名	成願年月日
二四三六	故 太田 チエ	三・九・八
二三九〇	故 稲田 安子	三・九・九
一九五九	故 戸井田善次郎	三・九・一五
一九三三	故 田中 邦夫	三・九・二七
一七八七	故 石毛 悦子	三・一〇・五
二三一九	故 伊山寿美子	三・一〇・八
四八〇	故 前野 和彦	三・一〇・一〇
五四九	故 植木 文女	三・一〇・二二
一六〇〇	故 城下 政子	三・一〇・二八
一七四六	故 山口 勇三	三・一〇・三〇
二〇四八	故 中野 泰	三・一一・六
三五七	故 石川 喜子	三・一一・八
二四四五	故 長谷川正男	三・一一・一二
二二九四	故 都賀 光彦	三・一二・七
二一一二	故 海老根敏行	三・一二・二一
二四三二	故 飯島 次男	三・一二・二二
一八六五	故 丸山 誠	三・一二・二六
二三〇二	故 杉永 政子	四・一・五
一七六〇	故 青木 昭子	四・一・六
一一一九	故 金子 愛子	四・一・一二
二四三七	故 中澤 弘基	四・二・五
一七八五	故 藤﨑 登美	四・二・五
二〇八五	故 太田 泰雄	四・二・二六
一四四五	故 渡辺ミチイ	四・二・二八
八三〇	故 柏﨑 恒雄	四・四・三
一四七〇	故 稲角 良子	四・四・一九
一七七四	故 村上きのい	四・五・五
一〇七八	故 鈴木 敏正	四・六・五
二二五九	故 長谷川八重	四・六・五
二三二二	故 武石久美子	四・六・一〇
一五六七	故 岩田 孝一	四・六・一五
一八三七	故 田口 吉元	四・六・一九
二二九一	故 乾 淳子	四・七・三
一九六二	故 塙 まち子	四・七・一八
二四二一	故 香田 澄子	四・七・二九
二四二六	故 森田 三郎	四・八・六
一五九二	故 佐々木郁代	四・八・一八

筑波大学白菊会 規約

（名称及び事務所）
第一条　本会は筑波大学白菊会と称し、その事務所を筑波大学医学群内に置く。
（目的）
第二条　本会は会員の親睦と献体運動の推進を図ると共に、医学の発展と人類の福祉に貢献するために、会員の遺体を筑波大学医学群に寄贈することを目的とする。
（事業）
第三条　本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
１、　会員の親睦
２、　献体運動の推進
３、　会報の発行
４、　その他、本会の目的を達成するために必要な事業
（会員）
第四条　本会の目的及び事業に賛同し、自らの遺体を寄贈する目的を持って入会を申し出た者を会員とする。ただし、家族、またはこれと同様の者の同意を得た者でなければならない。会員は本人の希望により退会することができる。
（役員）
第五条　本会に次の役員を置く。
１、　会長１名、理事長１名、理事若干名、幹事若干名
２、　会長は、筑波大学医学群長が務める。
３、　理事は、筑波大学医学群解剖学担当の教員が務め、理事長の選出は、理事の互選による。
４、　会長は本会を代表し、会務を総理する。
５、　理事長は会務を統括し、理事は本会の運営に関して協議し会務を分担する。
６、　幹事は筑波大学医学群の事務職員の中から、会長が委嘱し、庶務及び会計を処理する。
（任期）
第六条　役員の任期は２年とする。但し、再任を妨げない。
（顧問）
第七条　本会に顧問若干名を置くことができる。顧問は、理事会の議決により、会長がこれを委嘱する。その任期は１年とする。但し、再任を妨げない。
（会議）
第八条　総会は、年１回会長が召集し、事業報告及び会員の意見交換の場とする。
（会計年度）
第九条　本会の会計年度は、４月１日から翌年３月３１日までとする。
（経費）
第十条　本会の経費は、寄付その他の収入もってこれに充てる。
（補則）
第十一条この会則に定めるものの他、本会の運営に関して必要な事項は、理事の同意を得て会長が定める。
（感謝状）
第十二条献体された遺族に対し、会長（医学群長）より感謝状を交付する。

付則
この規約は、昭和58年４月１日から施行する。
この改正規約は、平成24年４月１日から施行する。

筑波大学白菊会慰霊碑案内図

○ 霊園は学園西大通り入口（交差点）から約１キロ程お進みいただいてから右折願います。

○ 霊園内の白菊会墓所につきましては、墓地区画通路の入口から70m程直進した左側にございます（下記の白菊会合葬墓及び慰霊碑の写真参照）。

（交通ご案内）

車利用の場合（常磐自動車道）
　○土浦北I.Cから15分
　○桜土浦I.Cから23分

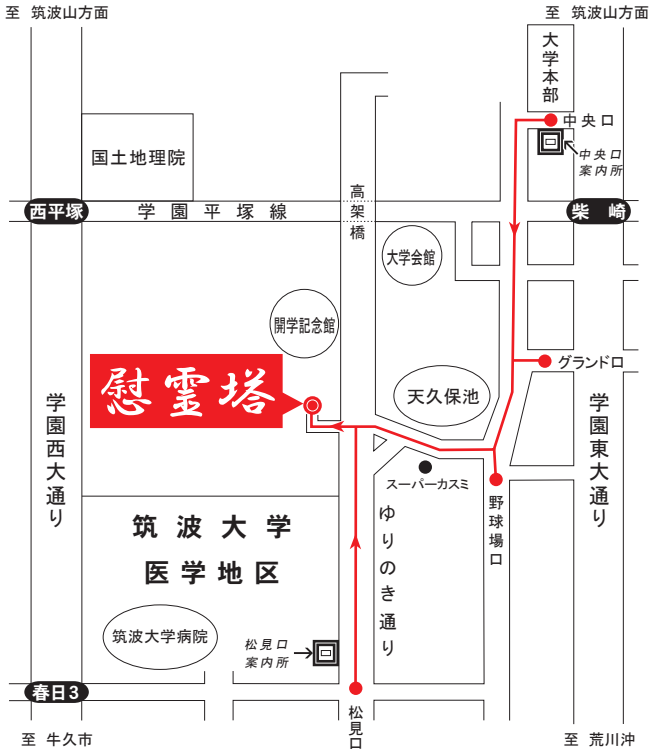
高速バス（つくば号）利用の場合
　○東京駅八重洲南口（②のりば）から「筑波大学行き」乗車～ つくばセンターまで70分

鉄道・バス利用の場合
　○常磐線土浦駅西口（③のりば）関東鉄道バス「つくばセンター行き」乗車～つくばセンターで下記のつくバスに乗り継ぎ
　○つくばエクスプレス（TX）つくば駅隣接のつくばセンター（③のりば）つくバス・北部シャトル「筑波山口行き」乗車～「大穂窓口センター」下車

（所在地）〒300-3253　茨城県つくば市大曽根根本333
（お問い合わせ）０２９（８６４）６６０６

・お車でお越しの際は、上記の所在地あるいは電話番号をナビにご入力願います

筑波大学白菊会慰霊塔案内図



（交通ご案内）

車利用の場合（常磐自動車道）
　○土浦北I.Cから20分
　○桜土浦I.Cから20分

高速バス（つくば号）利用の場合
　○東京駅八重洲南口（②のりば）から「筑波大学行き」乗車～ つくばセンターまで70分

鉄道・バス利用の場合
　○常磐線土浦駅西口（③のりば）関東鉄道バス「つくばセンター行き」乗車～つくばセンターで下記の筑波大学循環バスに乗り継ぎ
　○つくばエクスプレス（TX）つくば駅隣接のつくばセンター（⑥のりば）関東鉄道バス-筑波大学循環バス（右回り）乗車～「平砂学生宿舎前」下車

お願い

ご住所を変更された場合は、新しい住所を白菊会事務局（電話　〇二九―八五三―三二三一）へお知らせ下さい。住所が分からずご連絡がとれないケースが増えております。

「会員が亡くなられた時に、していただくこと」
ご遺族の方々へのお願いです

一、ご遺体を大学へ引渡す時刻の打合わせ

まずご遺族の間で次のことをお決めになって下さい。

(1)お通夜をせずに直ちに引渡す

(2)お通夜をしてから引渡す

(3)お通夜をして告別式をすませてから引渡す

右のうちどれかにきまりましたならば筑波大学献体事務室の担当者（電話〇二九・八五三・三二三〇）と、ご遺体引渡しの場所と時刻を打合わせてください。休日・夜間のお引取は大鵬社（電話〇二九・八二二・八三三三）に直接連絡下さい。

ご遺体の輸送は大学がお引受けし、原則として自動車がお迎えにあがりますし、(1)の場合には必要があれば大学からお棺を持参することになっていますがこの点も打合わせて下さい。

(注)ご遺体の大学への引渡しが二十四時間を超えるときはお棺の中へドライアイスを入れ、ご遺体の保存に御留意下さい。

二、必要書類の用意

(1)「埋火葬許可証」を急いでお取り下さい。これは医師の死亡診断書をそえて市町村役場へ「死亡届」を出すとすぐにもらえます。

(2)「埋火葬許可証」の記入の際、火葬場所は県内の方は最寄りの火葬場所をご記入願います。尚、県外の方は土浦市田中二丁目一六番三三号、土浦市営斎場、火葬年月日は一年後として下さい。

(3)「解剖に関する遺族の承諾書」については大学から書式を持参しますので、ご署名とご捺印をお願いいたします。